

琉球大学学術リポジトリ

プロフェッサー・オブ・ザ・イヤーを受賞して

| | |
|-------|--|
| メタデータ | 言語: 出版者: 琉球大学大学教育センター 公開日: 2018-07-17 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 上地, リリア, Uechi, Lilia メールアドレス: 所属: |
| URL | http://hdl.handle.net/20.500.12000/41027 |

プロフェッサー・オブ・ザ・イヤーを受賞して

「スペイン語入門」担当 上地 リリア（非常勤）

はじめに

私は、南米ペルーで生まれ育ち、30歳までペルーで過ごしました。大学では教育学部を専攻しましたが、最初から教師になろうとは思いませんでした。

高校卒業後、英語を生かし、スペイン語/英語の通訳者になるため、翻訳・通訳学部に入りました。日本語を話さない家庭環境で育ったので、大学一年の時、日本語も習い始めました。これが教師になるきっかけになりました。JICAの日本語教師育成研修に運よく選ばれ、東京玉川大学で6ヶ月間教育や教授法、教材研究等に関する勉強ができました。この時、先生方の熱心さや情熱に感動し、将来は先生になることを決めました。

ペルーに帰国後、教育学部に変更、国文学の教師になることを決めました。大学に通いながら、日秘文化会館で、現地の成人学生たちに日本語を教え、一方、大学の教育実習の一環として、ペルーの中学校、高校でスペイン語と文学の授業を担当している先生のアシストをしていました。日本で学んだことを現地の環境に合わせ、いろいろ工夫をしながら教えていたつもりでしたが、自分が思い描いていた授業とは遥かに遠く、納得のいく授業はできませんでした。毎日新しい問題にぶつかり、いつもがっかりしていました。人にもものを教える難しさに直面し、日に日に教える自信を無くし、教員の道を選んだことが間違っていたのかとも思うようになりました。そのまま4年が過ぎ、大学5年目の教育実習の時、成人用の高校認定クラスで国語の授業を任せられました。ほとんどの学生は、私より年上で不安でした。しかし、目の前にいた20人くらいの大人たちが、私の話真剣に耳を傾け、興味津々に授業を受けるのをみて、とても感心しました。45分の授業をととても長く感じましたが、授業の終了の合図と共に、クラス全体から拍手をもらった事を今でも忘れません。その時、自分が持っている知識を皆と共有する楽しさを覚えました。教師になるという夢は決して間違っていないと初めて思いました。また、先生の熱心さは学生に伝わると思いました。

ペルーの学生たちは決して恵まれた環境で勉強していませんが、短時間で第二外国語を話せるようになります。彼らは、間違えることを恐れず、恥ずかしがらずに人前で話すことに慣れていきます。納得するまで質問もよくします。周りの人の事を気にしません。先生が指示するのも待たずに、自分から積極的に話すので、会話力も上がり、語学の基礎も全体的に上がると思います。

心構え

琉球大学でスペイン語を教え始めて、20年目になります。言葉の表現、綴り、文法は、常に変わり続ける様に、教え方も時代と共に変える必要があると思います。スペイン語の場合は、21ヶ国という幅広い地域で話されているのでスペインのスペイン語と他のスペイン語圏のスペイン語、この両方を教える必要があると思います。地域によっても表現の仕方、物の考え方も違う

ので、常に新しい情報を得て、研究することは重要だと思います。

また、授業では、言葉と文化とのつながりを強調します。文法を教えながら、ラテン系の人たちの良いところも身に付けながら言葉も文化も自然に覚えていくように心がけています。

日本の学生は答えが分かっているのに黙っていますので、全員に参加させるよう工夫します。また、間違えるのが恥ずかしいので、最初は簡単な練習で自信を付けていくのが大事だと思います。

初日の挨拶で学生に伝えます。「どの外国語を習得する際にも、間違えるのは当たり前です。学生は間違っても良い、社会人になってから間違えると恥をかきます。今の内、沢山間違っても、沢山直されて多くのスペイン語を話せるようになりましょう。」次に、学生に英語を話せるのかを訪ね、ほとんどが話せませんと答えます。逆に、南米の場合は、外国語の言葉を10個ぐらい言えたら、その外国語を話せると言います、と伝えると、彼らも少し安心し、やる気が出ると思います。

授業の準備

・カード作り

学生一人一人の名前を紙に書き、毎回順番よく授業に参加させるようにします。同時に学生の弱点、注意事項などもこのカードにメモしています。

・初日の授業からスペイン語の実用性や得ることを話す

スペイン語は日本人に発音しやすいと伝えます。スペイン語の母音が日本語とほぼ同じ、しかも、ローマ字通りに発音をすれば何とか通じる、と伝えると、会話が苦手な学生でも自信が持てるようになります。

単語も文法も英語に似ているものが多いので、スペイン語を学ぶことで、英語の理解が深まります。

スペイン語が話せたら、沢山の国に旅行に行けます。

有名な人たちもスペイン語を話せます。例えば、サッカーのジダン、ベッカム、女優のエマ・ワトソン、マドンナ、ジョコビッチ、レディー・ガガ等。

スペイン語圏の作家のノーベル文学賞受賞者数は11人います。

これらの情報を伝えると、学生たちはやる気を持ってスペイン語に取り組むことができると思います。

・スペイン語の特徴について話す

スペイン語（西語）は21ヶ国で話されています。

世界で4番目に多く話されている言語（約4億2000万人）です。

国際連合においては、6つの公用語の1つです。

・スペイン語圏の文化を教える

世界的に見ても変わった祭りである牛追い祭り、トマト祭りはスペインで行われます。

学生の集中力が落ちてきたと思ったら、ペルーや南米のエピソードを通して文化の違いを紹介します。

授業の工夫

1. その日の授業を計画、整理して時間が足りるかを確認します。授業中に発生しそうな質問に対し常に準備をします。情報をネットで調べ、正しいと判断した情報のみ伝えます。
2. できるだけ早く学生の顔と名前を覚えるため、授業の5分前に授業に入り、入ってくる学生に挨拶をします。そして自然に顔を覚えていきます。直接「Hola! (buenas tardes)」と丁寧に挨拶をすると、学生たちも徐々に挨拶する習慣が生まれ、友好と尊重の関係もいつも維持できると思います。
3. 授業の最後には簡単な宿題を出します。これにより学生たちは次の授業までに宿題をする約束をし、先生は次の授業の準備に取り掛かるといってお互いの暗黙の約束が結ばれます。

授業の進み方

出席はスペイン語で取り、スペイン語で答えさせます。学生の名前の前に **señor, señorita** を付けます。

授業は説明と実践に分けます。文法を説明するときは英語との比較もします。

テキストはベースとして説明に使用し、補足教材も準備をします。自ら作成したプリント教材は主に練習用に使います。学生に分かりやすく、簡単なものを作成します。

学生に参加させ、理解度の確認をします。学生が参加すると、90%ほど覚えられ、頭に残ると思います。また、質問をする場合、学生が答えられると判断したもののみをします。学生が理解していない場合、前に進まず、より簡単に再び説明をします。

新しいテーマに入るときは、簡単に説明し、イラストが入ったプリントを使います。イラストもできるだけ簡単なものを使い、多くの情報で学生を圧倒させないようにしています。その方が学生の記憶に残りやすいと思います。

クラスには必ずといっていい程サッカーの好きな人、フラメンコ、ラテン音楽、サルサに興味がある人がいるので、サッカーに関する言葉、スペイン語圏の友達ができたら役に立つ言葉、いつか旅行した時に買い物の時に役に立つ表現も紹介します。

時には、視聴教材として流行っている音楽を聴かせたり、DVDを通して有名な祭りの紹介、映画のワンシーンなど、すべてスペイン語の言語と文化に関するものを使用します。特別な日にはゲーム（クリスマスの日の授業はクリスマスビンゴゲーム）をします。

注意していること

- ・常に簡単な言葉を使います。
- ・板書は読みやすい字、綴り字は使いません。
- ・難しい発音は大きめに、はっきり発音します。例えば、l・r・rr の発音は口の中のどこで発生しているのか等。
- ・スペイン語には名詞に数だけでなく性もあることを学び、その後、冠詞、形容詞もそれぞれ数・性があるので、新しい名詞を覚える時は冠詞に合わせて覚えさせるよう意識し、練習しているう

ちに男性名詞・女性名詞かを考え、徐々に判断できるようになります。

- ・映画のワンシーンは5分程度に編集します。
- ・学生の間違いをできる限り分析します。間違えたら、直ちに説明を含めて訂正します。
構文の間違いは黒板に書き、一斉に説明をします。
- ・学生の集中力が欠けてきたときは、私が日本語を習い始めた時の苦心した話をします。
- ・学生たちの日常生活のこと、バイトや趣味、空き時間の使い方などを聞きながら、それらの語彙やテーマを練習問題につなげます。
- ・学生によっては、ちょっとしたアドバイスも必要です。アドバイスや注意は一人一人に個別に対応しています。
- ・簡単な会話や自己紹介をさせたりします。
- ・テストは大きめの字で、読みやすいようにしています。

結論

初日の授業の印象が最も大事だと思います。

授業が楽しいと、学生たちもよりよく勉強し、短時間で覚えます。

ビデオは学生が集中し、理解する時間を短縮します。

結果のみではなく、過程を重視します。

授業中では、学生と共に、お互いに異文化を学び、共に成長しています。

私も教えながら楽しむことを心がけています。

おわりに

これから、進んだ技術的なツールに慣れ、iPad、プロジェクター、デジタルホワイトボード等の使い方をこなし、いつでも授業で使えるよう準備したいと思います。

26年間の教師生活の中で達成感もあり、絶望感もありましたが、今回のプロフェッサー・オブ・ザ・イヤーの受賞は最高の喜びです。教師は職業なので、努力するのは当たり前ですが、学生たちがそれをちゃんと認めていることは非常に嬉しいことです。一方、大学の教育は教師のみの仕事では成り立たないことに気づかされました。技術的な支援を与える人たち、事務関係、教務関係やコピー室の方々、また、あまり目立たないけれどもいないと困る、清掃の仕事をしてくれる用務の人たち、いろんな方が参加し、全員の共同協力があるから、私たち教師は快適な環境で作業ができます。

最後に、プロフェッサー・オブ・ザ・イヤーを発案された琉球大学教育センター、教育改善実施事業に携わる学生部、教務課や他の関係者たちに深く感謝いたします。